

論説

朝鮮・世宗六年の定数寺刹指定とその意義

——慶尚道地域の事例を中心として——

安田純也

一 問題の所在

「仏氏之害、倫理を毀棄し、必ず將に禽獸に率^{したが}いて人類を滅ぼすに至らしめんとす。名教を主^{つか}る者は、当に敵と爲して力めて攻むるべき者なり。」——朝鮮王朝創業の立役者鄭道伝が仏教を非難して語ったこの言葉によると、仏教は倫理を破壊して禽獸に従って人類を滅ぼすものであり、儒教を司る者は敵として攻撃するのにとめなければならぬ、という。

朝鮮半島において四七五年間続いた高麗王朝が滅亡して朝鮮王朝が成立するにともない、それまで高麗のもとで繁栄を続けてきた仏教は抑圧（抑仏^②）を余儀なくされる。朝鮮仏教約一、六〇〇年の歴史において、この朝鮮王朝初期がもっとも大きな転換点にあたる。先行研究では、この抑仏政策について、主として1思想的立場からの儒者

の斥仏（排仏、廃仏）論の研究⁽³⁾、2 仏教政策の研究⁽⁴⁾、3 寺刹の奴婢、土地の所有権等の諸制度の研究⁽⁵⁾、が行われてきた。

本稿に関わる2、3の研究では、朝鮮初期についての基本史料であり、かつ編年史料である『李朝実録』（Ⅱ以下、『実録』）に基づき、当時の政策に即して編年的に整理する形で行われた。これらの研究では、中央レベルにおける政策の議論・立案↓国王の裁可↓施行の過程を記録する『実録』に多くを依拠しているものの、その政策が実際に実施されたのかについては疑念を呈することはあっても具体的に言及されることはなかった。

そのような中で、二人の先学の説が注目される。まず、韓国の李廷柱氏は、太宗代から世宗代にかけて強力な抑仏政策が行われたものの、政策と実態との間に隔たりがあるとし、これらの政策がそのまま実施できない「死法」であったと指摘した。⁽⁶⁾

李氏が指摘したように、朝鮮初期に寺刹数の削減が行われ、寺刹の建立は継続して禁止されているにもかかわらず、寺刹の重創（再建）はたびたび行われており、施行された政策が文面通りに施行されていたとは考えにくい。その一方で、政策がまったく施行されていない形式的な法であったのかということには疑念が残り、史料を補った上での具体的な検証が必要である。

もう一つは、有井智徳氏の説である。有井氏は、土地制度史の立場から政策について考察し、太宗、世宗代の寺田改革は、全国の寺刹の田地をすべて属公（政府が没収すること）したのではなく、定数外とされた寺刹の収租地を属公したのに過ぎないのであり、定数外の寺刹では自ら耕作する土地としての寺田は存続したとしている。⁽⁷⁾

有井氏の解釈によると、太宗、世宗代の改革は収租地としての寺田（及び奴婢）のみが属公されたことになり、実質的な寺刹自体の削減には及ばなかったことになる。有井氏は、政策の施行自体は認めつつも、その影響を限

定的⁽⁸⁾に捉えようとする立場をとっている。

こうした見解の差異を埋めることが求められるが、先行研究では中央レベルにおける政策の研究が蓄積されてきたものの、実際に政策が施行された地方社会の観点からの研究が不足している。そこで、本稿では、特定の時期、場所に焦点を合わせ、抑仏政策の一端について検討を行うこととする。

時期は、朝鮮前期の仏教政策のうち最も「革新的⁽⁹⁾」な政策（崔在馥氏）であるとされる世宗六年（一四二四）四月の三六カ寺の定数寺刹の指定を基準とする。本稿の二章では、『実録』の記述に則して世宗六年に至るまでの経過を整理し、三章では世宗六年以後について検討する。

場所は、朝鮮半島の南東部の慶尚道地域を対象とする。慶尚道は、新羅の古都慶州を含む地であり、三国時代以来長きにわたって寺刹の建立が行われてきた地である。史料的に見ても一五世紀の『慶尚道地理志』、『慶尚道統撰地理誌』が伝存している。先行研究では『世宗実録』地理志、『(新增)東国輿地勝覧』といった全国地誌を参照することはあっても、朝鮮初期の地方誌として唯一伝存する慶尚道の地誌はほとんど参照していない。本稿の三章では、こうした地誌を活用することで、世宗六年以後に慶尚道で起こった動きを検証していくこととする。

二 定数寺刹指定とその前史

三国時代に朝鮮半島へ伝来した仏教は、中央から地方へと波及し、この動きは高麗時代に至るまで継続され、寺刹と民家が混在するほどとなり、末期には河辺や山奥で寺刹のないところはないとされ、寺刹は莫大な財産を蓄えることとなった⁽¹⁰⁾。それに対して朱子学を信奉する新進官僚を中心に仏教教団に対する批判が台頭し、さらに進んで

財源確保を目的とする抑仏政策が実施され、朝鮮王朝の第三代太宗、第四代世宗の時代には僧、田地、奴婢の額を定めた定数寺刹の指定へと帰結する。

まず、太宗六年（一四〇六）三月には、高麗時代（前朝）の『密記』に記載された裨補寺刹と地方各邑の『踏山記』⁽¹¹⁾に記載された寺刹の中で、漢陽（新都）、開城（旧都）には禅宗・教宗の各一カ寺を指定し、属田二〇〇結、奴婢一〇〇人を支給して僧一〇〇人を供養し、そのほかの各寺には田一〇〇結、奴婢五〇人を支給して僧五〇人を供養し、各道の界首官には禅宗・教宗の中から一カ寺を指定し、田一〇〇結、奴婢五〇人を支給し、各邑の邑内の資福寺には田二〇結・奴婢一〇人を支給して僧一〇人を供養し、邑外の各寺には田六〇結・奴婢三〇人を支給して僧三〇人を供養した。定数外の寺刹の田地や奴婢はすべて属公し、これらの寺刹には柴地（燃料補給地）一、二結のみを支給した。この時認定された寺刹は、全部で二四二寺であった。⁽¹³⁾

太宗七年（一四〇七）二月には、定数内の資福寺の中には廃寺となっていた寺も含まれており、その一方で古くからの大寺でありながら定数外となった寺刹もあるため、山中や河辺の景勝地の大寺を指定して各邑の資福寺に代替することとした。この時、全部で八八カ寺が代替された。⁽¹⁴⁾

続く世宗六年（一四二四）四月には以下のような政策が施行された。⁽¹⁵⁾史料が長文にわたるため、慶尚道以外の地域の寺刹名及びその属田、居僧数を省略して引用すると以下の通り。

礼曹啓すらく、「釈氏の道、禅教両宗のみ。その後正伝・傍伝、各業とする所を以て、分ちて七宗と為す。誤を伝え訛を承け、源は遠くして末は益々分れ、実にその師の道に愧ずる有り。且つ中外に多く寺社を建て、各宗に分属す。その数は猥りに多く、緇流四散し、曠廢して居らず、修葺して継がず、漸く頽毀を致す。乞うらくは曹溪・天台・摠南三宗を以て合せて禅宗と為し、華嚴（嚴か）^{マツ}・慈恩・中神・始興四宗もて合せて教宗と

為す。中外に僧徒を寓するに堪うるの処を択び、量えて宜しく三十六寺を置き、兩宗に分隸し、田地を優給し、居僧の額を酌定し、群居・作法して、これをしてその道を精修せしむ。仍お僧録司を革め、京中興天寺を以て禪宗都會所と為し、興徳寺もて教宗都會所と為さしめよ。年行俱に高き者を揀取し、以て兩宗行首掌務と為し、僧中之事を察せしむ。今分属せる寺社居僧の定額・田地の結数を將って、開坐・啓聞せられんことを。禪宗属寺十八、田四千二百五十結。(中略)慶尚道晋州断俗寺元属田一百結、今加給一百結、居僧一百。慶州祇(ぎ)か)林寺元属田一百結、今加給五十結、居僧七十。(中略)教宗属寺十八、田三千七百結。(中略)慶尚道巨濟見嚴寺元属田五十結、今加給一百結、居僧七十。陝川海印寺元属田八十結、今加給一百二十結、居僧一百。(中略)これに従う。(以下、史料A)

史料Aでは、礼曹の啓に基づき、世宗は以下のように裁可した。1曹溪宗、天台宗、摠南宗の三宗は禪宗に、華嚴宗、慈恩宗、中神宗、始興宗の四宗は教宗に所属させ、2中央、地方の寺刹の中で僧が居住することができ寺刹を三六カ寺指定して、各一八カ寺を兩宗に分属させ(うち、慶尚道は禪宗二カ寺、教宗一カ寺)、3三六の指定寺刹には定額の田地を支給して居僧の数も決定し、4僧録司を廃止して、王都内の興天寺を禪宗都會所に、興徳寺を教宗都會所とした。

崔在馥氏は、この三六カ寺の定数が世宗の在位期間中は大きく変化しなかったとし、さらにこの時支給された田地の量(結数)や地域分布を分析し、王都漢陽やその周辺に位置する王室のために仏事を行った寺刹に多くの田地が支給されたこと、そのほかに地域別に禪宗、教宗の寺刹を分布させたこと等を指摘している。¹⁶⁾その上で、崔氏は三六カ寺が地方の治所ないし中心所としての役割を主とし、朝鮮初期から中期に向かうにつれて、三六カ寺が王室や国家のための機能よりも民衆のための機能を果たす寺刹へと変貌したと指摘している。

崔氏の指摘のうち、地域分布や機能の変化については首肯できるものの、三六カ寺の定数寺刹の制度が形式的もしくは実質的に有効であった時期については修正が必要であり、また定数寺刹が地方の中間治所・中心所の機能を果たしていたとする見解は崔氏以前から通説となっているものの、その論拠は特に提示されていない。

三 慶尚道地域の事例

本章では、定数寺刹の指定が慶尚道に与えた影響について、定数寺刹、定数外寺刹に分けて検討する。

1 定数寺刹

世宗六年四月には、慶尚道では四カ寺が指定された。史料Aに基づき、四カ寺の属田数、居僧数を一覧にすると表1の通り。

以下、一カ寺ずつ検討していく。

〔断俗寺〕

晋州の断俗寺は、慶尚南道山淸郡丹城面に存在した寺であるが、現在は寺址が残るのみである。新羅の景德王二年（七六三）、上大等信忠らが免職された際に王の寵臣となっていた大奈麻李純が突然山中に隠棲して僧となり、景德王のために断俗寺を建てたという。⁽¹⁷⁾断俗寺は八世紀の創建と伝えるが、一九九九年に国立昌原文化財研究所が発掘調査を行った結果、九世紀前半以降の遺物の存在は確認されたものの、八世紀の遺物は確認できていない。⁽¹⁸⁾景德王代の創建の是非はともかく、断俗寺が新羅以来の伝統を持つ古刹であったことは、この寺に新羅の憲徳王五年

(八一三年) に建てられた『神行禪師碑』⁽¹⁹⁾ が存在していたことから確認できる。

断俗寺には、世宗六年以前には一〇〇結支給されていた。太宗六年に各道の寺刹の田地支給額を決定した際、各道の界首官には禪宗・教宗の中から一寺を選んで置き、田一〇〇結、奴婢五〇人を支給したことからすると、断俗寺はこの時に界首官である晋州牧の定数寺刹として田一〇〇結、奴婢五〇人が支給されていたのであろう。その上で世宗六年に一〇〇結が加給され、属田は二〇〇結となっている。

『世宗実録』卷一五〇・地理志・慶尚道晋州牧条では、断俗寺の項で「給田一百五十結」としている。『世宗実録』地理志は、端宗二年(一四五四)に完成した『世宗実録』の一部として現在に伝わるが、その原型は世宗六年(一四二四)十一月に世宗が卞季良に全国の地誌及び各邑の沿革を撰進することを命じたのに始まり、春秋館がこの事業を担当して資料蒐集を行い、かつ寺刹関連の文籍も探して地理志の編纂に備えた。そして、『慶尚道地理志』等の各道の地理志を一カ所に集めて『新撰八道地理志』(世宗一四年(一四三二)完成)が編纂され、後に『世宗実録』の地理志として編入された。『慶尚道地理志』仏宇条には各寺刹の給田数の記載がないので、『世宗実録』地理志に見える断俗寺の給田数の記載は、ほかの資料に基づいて得られた情報であろうが、断俗寺は世宗六年から同一

表1 慶尚道内の定数寺刹(史料A)

宗派	邑名	寺名	元属田(結)	加給田(結)	属田合計(結)	居僧(人)
禪宗	晋州	断俗寺	一〇〇	一〇〇	二〇〇	一〇〇
禪宗	慶州	祇林寺	一〇〇	五〇	一五〇	七〇
教宗	巨濟	見巖寺	五〇	一〇〇	一五〇	七〇
教宗	陝川	海印寺	八〇	一二〇	二〇〇	一〇〇

四年(一四二四〜一四三二)のある時点では一五〇結の田地を所有していたと考えられる。世宗六年に属田を一〇〇結加給して二〇〇結とすることが決まったものの実際には五〇結のみ加給されたか、一〇〇結加給されてまもなく五〇結減給

されたかのいずれかであろう。

なお、『慶尚道地理志』晋州道晋州牧官条では、断俗寺について「不革一。断俗寺」とし、『世宗実録』地理志にはない「不革」の文字を明記している。『慶尚道地理志』では、少なくとも晋州牧の仏宇としては一寺（断俗寺）のみがなくさずに（不革）残っている、としている。

〔祇林寺〕

慶州の祇林寺は、慶尚北道慶州市陽北面にあり、新羅の神文王（在位六八一―六九一年）がこの寺の付近に立ち寄ったとする記述が見えるので、遅くとも七世紀には創建されていた。⁽²²⁾ 祇林寺には、世宗六年以前には一〇〇結支給されていた。晋州牧の断俗寺と同じく、太宗六年以来、界首官である慶州府の定数寺刹として田一〇〇結、奴婢五〇人を支給されていたのであろう。その上で世宗六年に祇林寺には五〇結が加給され、属田は一五〇結となっている。ところが、『世宗実録』卷一五〇・地理志・慶尚道慶州府条では、祇林寺の項で「給田一百三十結」としている。断俗寺の場合と同じく、実際の加給は半分程度にとどまったか、五〇結を加給されてまもなく二〇結減給されたかのいずれかであろう。そして、『慶尚道地理志』慶州道慶州府仏宇条に「不革一、祇林寺」とあるので、祇林寺は慶州で認定された唯一の寺刹であった。

〔見巖寺〕

巨濟⁽²³⁾の見巖寺は、太祖四年（一三九五）二月に毎年二度水陸齋を行う所として指定された寺刹である。⁽²⁴⁾ 太宗代には、同王五年（一四〇五）十一月に王命により興天寺などとともに特別に田地、奴婢の属公を免れ、⁽²⁵⁾ 太宗一四年（一四一四）二月に、太宗は見巖寺などで開催される水陸齋を毎年二月一五日から正月一五日に変更するように命令を下している。⁽²⁶⁾

見巖寺には、世宗六年以前には五〇結のみ支給されていた。この支給額は各邑の資福寺の支給額の二〇結よりはるかに多く、邑外各寺の支給額六〇結には及ばない。同じく水陸斎の実施寺刹の場合、開城の観音窟の元属田が四五結、津寛寺のそれが六〇結であることからすると、太宗六年の定数寺刹とは別枠で五〇結前後の田地が支給されていたと考えられる。その上で世宗六年に見巖寺に一〇〇結が加給され、属田は一五〇結となっている⁽²⁸⁾。

見巖寺は、世宗七年（一四二五）一二月に同じく水陸社であった江原道の上元寺が災害をこうむった後にも、水陸斎を開催する場所として指定を受け続ける⁽²⁹⁾。朝鮮初期には、高麗時代以来の恒例仏事が続々と廃止されたものの、見巖寺は、水陸斎開催の寺刹として認定された⁽³¹⁾。『慶尚道地理志』晋州道居昌県条には「不革。見巖社。春秋国行祈恩」とある。見巖寺は居昌で認定された唯一の寺刹であり、「春秋国行祈恩」とは年二度政府が開催する水陸斎を指すのであろう。

〔海印寺〕

海印寺は、慶尚南道陝川郡伽倻面に所在し、太祖八年（一三九九）に漢陽の支天寺からこの寺へ高麗再雕大蔵經の経板が移されて今日に至っている。世宗二年（一四四〇）に、世宗が慶尚道觀察使にくだした命令の中で、海印寺は太祖が構えた所であり、壊れたところがあれば陝川郡守が修理しなければならないと述べたという⁽³²⁾。海印寺自体は新羅以来の寺刹であるものの、大蔵經経板の移動に際して太祖が大規模な重創を行ったことをうかがわせる。海印寺には、世宗六年以前には八〇結が支給されていた。海印寺の元属田は太宗六年時点の邑外各寺の支給額六〇結を超えている。海印寺は、経板が収蔵される前年の太祖七年（一三九八）正月以来、福靈寺とともに田租を自ら収税することを特別に許されている⁽³³⁾。また経板の印經事業を行うごとに歴代の国王から特別の経済支援を受けており、海印寺と歴代国王との密接な関係によって支給額が二〇結増額されたのであろう。その上で世宗六年に海印

寺に一二〇結が加給され、属田は二〇〇結とな⁽³⁶⁾っている。『慶尚道地理志』尚州道陝川郡任内冶爐県条には「不革一。海印寺」とある。海印寺は、陝川郡で認定された唯一の寺刹であった。

これらの寺刹の元々の給田額（元属田）や立地から考えて、世宗六年認定の四カ寺には太宗六年に各邑の邑内に設定された資福寺は含まれておらず、断俗寺と祇林寺は界首官内の認定寺刹であったと考えられ、海印寺や見巖寺は特定の仏事にかかわる寺刹であったために認定を受けたことであろう。

加えて、禅宗、教宗各一カ寺が指定され、禅宗の断俗寺と教宗の海印寺、禅宗の祇林寺と見巖寺がそれぞれ同額の属田結数、居僧数となっており、中央政府主導のもと両宗の均衡が考慮されている。

ところで、世宗六年四月に認定された全国三六カ寺について、史料Aでは礼曹が「中外に僧徒を寓するに堪うるの処を択び、量えて宜しく三十六寺を置き、両宗に分隸し、田地を優給し、居僧の額を酌定」するようにと言及しているものの、定数外の寺刹の扱いについては特に言及していない。しかし、『慶尚道地理志』仏宇条に掲載され、かつ「不革」と明記されたのは世宗六年四月に認定された定数寺刹の四カ寺に過ぎない。そのほかの寺刹は原則として一旦廃止されたと考えるべきである。

高橋亨氏に代表される通説では、世宗六年に指定された全国の三六カ寺は本山格としての資格を認定されたのみであり、ほかの寺刹をすべて廃止したわけではない⁽³⁶⁾としている。実際、太宗代には全国で二四二カ寺が認定され、朝鮮時代には一五世紀後半以降寺刹数が一、三〇〇〜一、七〇〇カ寺程度で推移⁽³⁷⁾しており、前後の時期の状況を考慮すればこうした見解が出てくるのはある意味当然である。ただし、ここで高橋氏らは三六カ寺を「本山」等と称しているものの、三六カ寺がそのほかの寺刹を支配したり、統括したりした論拠を提示していない。慶尚道の事例

から考えて、三六カ寺は世宗六年当時に廃止を免れた寺刹を指すと考えるべきであり、「本山」を指すとは考えられない。

その一方で史料Aと『世宗実録』地理志との田結数の相異から、世宗六年に指定された寺刹の田結数はそのまま施行されなかったか、まもなく変更を余儀なくされたと考えられる。

2 定数外寺刹

次に、定数外寺刹の状況について検討する。先述の通り、『慶尚道地理志』仏宇条には「不革」とされた四カ寺以外の寺刹を掲載していないものの、仏宇条以外の条文の中で二カ寺について以下の記事を載せている。

靈妙寺。唐の貞觀六年、新羅善德王の時剏する所なり。殿宇三層、体制殊異なり。羅時剏する所の殿宇一に非ざれども、他皆頽毀して以て尽く。独りこの殿のみ完全として昨の如し。

亡寺奉德鍾^{つづ}（鐘か）。大歴五年、新羅の恵恭王の時、鑄る所なり。重さ銅一十二万斤、これを撞かば則ち声百余里に聞こゆ。

この二つの記事は、慶州に存在した靈妙寺（靈廟寺）、奉德寺の鐘についての記事である。

靈妙寺は多くの仏殿が建てられたものの、『慶尚道地理志』編纂の時点では三層の仏殿⁽³⁸⁾一棟のみが残る状態であった。『慶尚道地理志』では廃寺となったとする記載こそないものの、仏殿一棟では「僧徒を寓するに堪うるの処」（史料A）でないのは明らかである。靈廟寺は特に破壊こそされなかったものの、寺刹としての機能を事実上喪失していた。

奉德寺は「亡寺」となったことが明示されており、この寺に存在した鐘についての言及している。この奉德寺

の鐘とは、聖徳大王神鐘⁽³⁹⁾を指すのであろうが、奉徳寺が廃寺となって仏具（鐘）のみが残る状況となったことが明示されている。

『慶尚道地理志』の記載による限り、慶尚道では断俗寺等の四カ寺のみが定数寺刹に指定され、そのほかの寺刹は特に破壊こそなされなかったものの、僧侶、田地、奴婢を喪失した寺刹はここで一旦廃止されたと考えるべきである。⁽⁴⁰⁾

慶尚道では世宗六年に断俗寺等の四カ寺のみが指定され、『慶尚道地理志』仏宇条でもその四カ寺のみが掲載されたものの、その後に編纂された『世宗実録』地理志には次の一カ寺の記載が見られる（表2参照）。

慶州の祇林寺、靈妙寺、奉徳寺は、祇林寺の宗派、給田額以外はすべて『慶尚道地理志』に依拠している。

密陽の瑩原寺、厳光寺は、『慶尚道地理志』に記載のない寺刹である。厳光寺は太宗七年に密陽邑内の資福寺の代替寺刹となるものの、世宗六年に再び定数外となっている。⁽⁴¹⁾

寧海の葦長寺も『慶尚道地理志』に記載のない寺刹である。

善山の竹林寺も『慶尚道地理志』に記載のない寺刹であるが、かつて南極老人星（人の寿命をつかさどると言われる星）が落下したために、毎年二度、中央から使者を派遣して祭祀を行うようになっており、「今」はそのための祭星壇が設置されているという。この寺は例外的に邑城（府城）内に設けられており、文宗元年（一四五二）五月に内処置使の辛晋保が靈山県の県監趙宝仁と通じて竹林寺の寺田を奪った事件が起きているので、世宗一四年（一四三二）以降に政府から老人星祭祀のための寺田が支給されたのであろう。

陝川の手印寺、晋州の断俗寺、居昌の見厳寺は、『慶尚道地理志』に「不革」の寺刹（仏宇）として登場しており、宗派と給田額が明記されている。

晋州の雙溪寺は、『慶尚道地理志』に記載のない寺刹であり、現在も慶尚南道河東郡花開面に所在する。ただし、『世宗実録』地理志には「殿宇頽圯し、只だ新羅の時に創する所の祖師殿のみ有り」とあり、祖師殿一棟のみで寺刹としての機能を事実上喪失している。

表2 慶尚道内寺刹一覽（『世宗実録』卷一五〇・地理志・慶尚道）

邑名	寺名	記事
慶州府	祇林寺	【在府東、屬禪宗、給田一百三十結。】
慶州府	靈妙寺	【唐太宗貞觀六年、新羅善德女主所創也。殿宇三層、壯麗異常。羅代塔廟、今皆頽毀、独此殿宛然如昨。】
慶州府	奉德寺	【今亡。有大鍾（鐘か）。唐代宗大曆六年辛亥、新羅惠恭王所鑄、重銅一十二万斤、撞之則声聞百余里。】
密陽都護府	埜原寺	【在府東。】
密陽都護府	嚴光寺	【在府東、有雀舌茶。】
寧海都護府	葦長寺	【在府西山。有井、水旱無増減。不潔之人照影、則清水變為泥色渴尽。】
善山都護府	竹林寺	在府城內西隅。【古者、以南極老人星照臨之地、每年春秋、遣使行祭、今有祭星壇。】
陝川郡	海印寺	在伽倻山南【屬教宗、給田二百結。（以下略）】
晋州牧	断俗寺	在州西四十二里【屬禪宗、給田一百五十結。（以下略）】
晋州牧	雙溪寺	在州西花開谷【殿宇頽圯、只有新羅時所創祖師殿。（以下略）】
居昌県	見庵（嚴か）寺	在加祚県牛頭山【屬教宗、給田一百五十結。我太祖命為水陸社、每年春秋、降香設齋】

・記事の【】内は分注。

『慶尚道地理志』と『世宗実録』地理志の寺刹関連の記事を比較すると、前者では仏宇条が立てられているのに対し、後者では特に独立の条目は立てられず、ほかの項目と混在する形で叙述されている。前者では四カ寺（ほかの条に掲載されている靈廟寺、奉徳寺を含めれば六カ寺）に比して、『世宗実録』地理志では倍近い数の寺刹が掲載されている。ただし、加増部分の寺刹は、宗派の所属や給田額の記載もなく、靈妙寺や雙溪寺のように廃寺同然のもの、奉徳寺のように実際に廃寺となっている寺も混在しており、どのような基準でこれらの寺刹を掲載したのかは不明瞭である。少なくとも『世宗実録』地理志では、『慶尚道地理志』とは別系統の情報源に基づいて、寺刹関連の記事を付加している。また、『世宗実録』地理志では、分注で定数寺刹の属宗と給田額を明記しており、定数寺刹とそのほかの寺刹を区別している。

最後に、睿宗元年（一四六九）に編纂された『慶尚道統撰地理誌』僧寺条について検討する。『慶尚道統撰地理誌』は、『慶尚道地理志』の続編として編纂され、寺刹については僧寺条が立てられ、寺刹の位置する山、寺名、所属宗派の名を記すこととなっている。⁽⁴³⁾『慶尚道統撰地理誌』僧寺条には、禪宗三九カ寺、教宗二〇カ寺、未詳六カ寺（未詳はいずれも慶州府の寺刹）の計六五カ寺が掲載されている。掲載寺刹数は、『世宗実録』地理志の実に六倍にもなる。

さらに、宗属未詳の慶州府の六カ寺を除く、すべての寺刹が禪宗か、教宗のいずれかに所属している。世宗六年では禪宗二カ寺、教宗二カ寺の定数寺刹のみが宗派に属しており、『世宗実録』地理志でも同じく禪宗二カ寺、教宗二カ寺の定数寺刹のみ分注の中で宗派が明示されており、定数外の寺刹については宗派を記しておらず、これらの寺は宗派に属していなかったと考えるべきである。⁽⁴⁴⁾ところが、『慶尚道統撰地理誌』には、世宗六年段階の定数寺刹である断俗寺等の四カ寺も掲載されているものの、世宗六年の定数寺刹と定数外寺刹との表記上の区別はなく

なっている。⁽⁴⁵⁾

『慶尚道地理志』、『世宗実録』地理志、『慶尚道統撰地理誌』と続く一連の地誌を検討した結果、世宗六年四月の改革は主要寺刹を禪宗、教宗兩宗のいずれかに所属させ、田地、奴婢を支給して住僧数を確定し、その一方で定数外の寺刹は原則として一旦廃止するものであった。ただしこうした原則はまもなく崩れ、定数外寺刹が増加（重創）して兩宗に所属していくことで、定数寺刹制は実効性を失っていったと考えられる。⁽⁴⁶⁾

『慶尚道統撰地理誌』僧寺条所掲の寺刹は、未詳を除き、禪宗が三九カ寺、教宗が二〇カ寺と禪宗の寺刹が三分の二近くを占める。世宗六年四月の改革では全国的にも慶尚道でも禪宗属の寺刹と教宗属の寺刹は同数指定されて、兩宗間の均衡が考慮されていた。しかし、『慶尚道統撰地理誌』所掲の寺刹は禪宗属の寺刹が増え、均衡が崩れている。均衡の変化は、太祖代以来中央主導で統制が進んできた状況から、世宗六年以降、地方で独自に寺刹が重創される方向へ転換した結果であろう。慶尚道では、その後寺刹数は大幅に増加し、『東国輿地勝覧』仏宇条では二七八カ寺を掲載している。⁽⁴⁷⁾ 世宗六年施行の定数寺刹制はやがて「死法」と化していくが、上記の転換の分水嶺となった点がこの政策の歴史的意義であると思われる。

四 おわりに

本稿では、『実録』の叙述に沿って抑仏政策の概要を紹介した上で、地方社会の具体例として慶尚道地域を取り上げ、世宗六年（一四二四）の事例に則した検討を行った。結果、世宗六年四月施行の定数寺刹制について、一部の寺刹を本山格として位置づけるもので必ずしも定数外寺刹の廃止を伴うものではないとする通説に対し、主要寺

刹を禅宗、教宗両宗のいずれかに所属させ、その一方で定数外の寺刹は原則として一旦廃止されたこと、ただしこうした原則はまもなく崩れ定数外寺刹が増加して定数寺刹制は実効性を失っていったこと、を指摘した。以後、慶尚道ではそれまで均衡を維持してきた禅宗、教宗間の均衡が禅宗側に大きく傾くが、この変化は中央政府主導の統制から地方社会の実情に即した状況へと変化したことによると推測した。

〔付記〕

本稿は、二〇〇九年度学習院大学東洋文化研究所〈東アジア学〉共創研究プロジェクトの成果の一部である。

注

(1) 鄭道伝のこの言葉は、太祖七年(一三九八)に鄭道伝の著述『仏氏雜弁』に対する權近の序文に登場する。この序文は『三峯集』巻九、『陽村先生文集』巻一七に収載されている。

(2) 元来、この時期の仏教政策を指して、廃仏政策、斥仏政策、排仏政策などの言葉が使われてきたものの、「廃仏(斥仏、排仏)論に基づく、抑仏政策」ととらえるのがより実態に即しており、近年の韓国における研究においてもこうした用語が使用されている(韓沽

勅『儒教政治와 仏教』(一潮閣、一九九三年)等)。

(3) 李相伯「斥仏運動の胎生と成長——朝鮮に於ける儒仏交替の機縁に関する一研究」(『東洋思想研究』三、一九三九年)、金海榮「鄭道伝의 排仏思想」(『清溪史學』一、一九八四年)、朴太源「麗末鮮初の排仏과 護仏論理——三峯과 己和喜 중심으로」(『釈山韓鍾万博士華甲紀念 韓国思想史』、一九九一年)、李廷柱「性理学 受容期 仏教 批判과 政治・思想的 変容」(高麗大学校民族文化研究院、二〇〇七年)。

(4) 韓沽勅「麗末鮮初の仏教施策」(『論文集』〈서울대

六、一九五七年）、韓祐勅「世宗朝에 있어서의 對仏 敎施策」（『震檀學報』二五・二六・二七、一九六四年）、韓祐勅前掲「儒敎政治와 仏敎」、韓基先「朝鮮朝世宗의 抑仏과 信仏에 대한 研究」（『弘益史學』三、一九八六年）、金煥泰「朝鮮 太宗朝의 仏事와 斥仏」（『東洋學』一八、一九八八年）、李逢春「朝鮮 開國初의 排仏推進과 그 實際」（『韓國仏敎學』一五、一九九〇年）、李逢春「朝鮮 世宗朝의 排仏政策과 그 變化」（『伽山李智冠스님華甲紀念論叢 韓國仏敎文化思想史』卷上、一九九二年）、崔在馥「世宗代 36寺의 指定과 機能」（『清溪史學』一四、一九九八年）、李廷柱「朝鮮 太宗・世宗代의 抑仏政策과 寺院建立」（『韓國史學報』六、一九九九年）、柳基貞「朝鮮前期 僧政의 整備와 運営」（『靑藍史學』五、二〇〇二年）、金相永「조선 초기 寺社革罷의 내용과 성격」（『僧伽』一九、二〇〇三年）。

(5) 金甲周「朝鮮前期 寺院田을 中心으로 한 仏敎界動向의 一考」（『東國史學』一三、一九七六年）、金甲周「朝鮮時代 寺院經濟研究」（同和出版社、一九八三年）、金甲周「朝鮮時代 寺院田의 性格」（『伽山李智冠스님華甲紀念論叢 韓國仏敎文化思想史』卷上、一九九二年）、金甲周「조선시대 사원경제사 연구」（『경인문화사』、二〇〇七年）、裴象鉉「高麗後期寺院田研究」（『國學資料院』、一九九八年）、宋洙煥「朝鮮前期의

寺院田——특히 王室關連 寺院을 중심으로」（『韓國史研究』七九、一九九二年）（再録：同氏「朝鮮前期 王室財政 研究」집문집、二〇〇〇年）、李炳熙「朝鮮初期 寺社田의 整理와 運営」（『全南史學』七、一九九三年）、河宗睦「조선 초기 사원 경제——국가 및 왕실 관련 사원을 중심으로」（『大丘史學』六〇、二〇〇〇年）。

(6) 李廷柱前掲「朝鮮 太宗・世宗代의 抑仏政策과 寺院建立」。

(7) 有井智徳「李朝初期における収租地としての寺社田」（『朝鮮學報』八一、一九七六年）、有井智徳「李朝初期における私的土地所有としての寺社田」（『朝鮮歴史論集』上卷、龍溪書舍、一九七九年）。

(8) 蔡尚植氏も、寺刹や寺刹の土地、奴婢の整備は部分的な交替のみで、完全に革去したものではなかったと指摘している（蔡尚植「고려・조선 시기 불교사 연구 현황과 과제」『韓國史論』〈國史編纂委員會〉二八、一九九八年）。

(9) 崔在馥前掲論文、九二頁。

(10) 『高麗史』卷一一五・李穡伝など。

(11) 『密記』は風水の大家とされる僧道説が選定した國家に裨益する寺刹を記録した書であり、『踏山記』は地方の寺刹を記録した書で風水に係した書であると考えられる。いずれも現在散逸しているが、両書に中

央、地方における公認寺刹が記録されていたようである。

- (12) 邑とは、各道の下に存在した留守府、大都護府、牧、都護府、郡、県の行政区画の総称である。朝鮮前期には、時期によって異なるが約三三〇の邑が存在した。

- (13) 『太宗実録』卷一一・六年三月丁巳条。

- (14) 『太宗実録』卷一四・七年二月辛巳条。

- (15) 『世宗実録』卷二四・六年四月庚戌条。

- (16) 宋洙煥氏も世宗六年の政策が王室関連寺刹を中心とした仏教整備であり、これらの寺刹を指定した詳細な基準はわからないが、地域的な案配を考慮したものであると指摘している（宋洙煥氏前掲論文、三八―四〇頁）。

- (17) 『三國史記』卷九・新羅本紀・景德王三十二年八月条。
なお、『三國遺事』卷五・信忠掛冠条によると、新羅の景德王三十二年（七六三）に信忠が致仕して僧となつて断俗寺を創建し、「大王」（孝成王か景德王）の福を祈ったという。また同条所掲の『別記』によると、（七四八）に李俊が槽淵小寺を改創して大利を作り、断俗寺と称したという。

- (18) 国立昌原文化財研究所編『山清断俗寺址 発掘調査報告書』国立昌原文化財研究所、二〇〇二年。

- (19) この碑は現存しないが、碑の内容は『海東金石苑』卷一に収載されて伝わっている。

- (20) 『世宗実録』卷二六・六年一月丙戌条。

- (21) 『世宗実録』卷二八・七年六月庚子条。

- (22) 『三國遺事』卷二・万波息笛条。

- (23) 巨濟島とは元来巨濟島に位置する邑であったが、「倭」の侵入を避けるため、高麗・元宗十二年（一二七二）から朝鮮・世宗四年（一四三二）まで居昌の加祚県（見巖寺の所在地）に僑居していた（『世宗実録』卷一五〇・地理志・慶尚道巨濟県条）。

- (24) 『太祖実録』卷七・四年二月戊子条。

- (25) 『太宗実録』卷一〇・五年一月癸丑条。

- (26) 『太宗実録』卷二七・一四年二月庚戌条。

- (27) 『世宗実録』卷二四・六年四月庚戌条。

- (28) この額は『世宗実録』卷一五〇・地理志・慶尚道居昌県条に記載の額と一致している。

- (29) 『世宗実録』卷三〇・七年二月甲申条。

- (30) 水陸斎は定宗二年（太宗即位年）（一一四〇）二月の仏事廃止以降も特別に存続を許されており（『太宗実録』卷一・元年正月丁丑条）、朝鮮初期に仏事の機能は水陸斎に統合されたともとらえることができる（李英華『朝鮮初期 仏教儀礼의 性格』『清溪史学』一〇、一九九三年）。

- (31) 同じく水陸斎を行う寺刹であった観音窟や津寛寺とは異なり、世宗六年四月の段階で見巖寺には水陸位田が支給されていない。史料の欠落の可能性もあるが、

各道、各宗派間の均衡を考慮した結果、水陸位田を除く一五〇結のみが支給されたと考えられる。

(32) 『世宗実録』卷八八・二二年一月己丑条。

(33) 『太祖実録』卷一三・七年正月甲戌条。

(34) 『定宗実録』卷一・元年正月庚辰条、『太宗実録』卷二五・一三年三月庚寅条。

(35) この額は『世宗実録』卷一五〇・地理志・慶尚道陝川郡条に記載の額と一致している。

(36) 「三十六ヶ寺ハ所謂本山格ノ寺刹ニシテ、他寺刹ハ其支配ヲ受クル寺菴トシテ存在シ、決シテ朝鮮全土ニ三十六ヶ寺ノミ留メシ意ニハ非ザルナリ。サレドモ太宗六年正月留メシ各宗合計二百三十二ヶ寺ノ中、僅ニ三十六ヶ寺ノミ寺格ヲ認メラレシトスレバ此ノ改革ノ勇断ナルヲ知ルベシ」(高橋亨『李朝仏教』宝文館、一九二九年、一三二頁)。ほか、韓沽勛前掲『儒教政治外 仏教』(一二四頁)、崔在馥前掲論文(一二六頁)、等でも同様の指摘をしている。ただし、李逢春氏は、三十六ヶ寺以外の寺刹について、居僧や田地が支給されておらず、自然に廃寺となったと指摘している(李逢春前掲『朝鮮 世宗朝의 排仏政策과 变化』、一二四五頁注二四)。本稿では李氏の見解に従う。

(37) 『新增東国輿地勝覧』、『輿地圖書』に依拠した李炳熙氏の整理による(李炳熙『朝鮮時期 寺刹의 敎的推移』『歴史教育』六一、一九九七年)。

(38) 一五世紀の文人金時習には「登靈廟寺浮図」(『梅月堂詩集』卷一二)と題する詩があり、その分注には

「惟だ一木浮図のみ独り存す」とある。金時習は木塔(木浮図)のみ残る靈廟寺を訪れたとしている。ゆえに、『慶尚道地理志』等に見える「三層殿宇」とは木造の塔を指すと考えられる(田中俊明「慶州新羅廃寺考(1)」、『堺女子短期大学紀要』一三三、一九八八年)、三六一三七頁。

(39) 現在は国立慶州博物館敷地内の鐘閣に懸けられている。

(40) ただし、例えば世宗七年(一四二五)八月に戸曹が廃止された寺刹(革去寺社)の材木や瓦によって京畿道高陽県の碧蹄駅の建物を修築することを求めて裁可を得ているように(『世宗実録』卷二九・七年八月戊子条)、廃止寺刹の財産は必要に応じてほかの用途に再利用された。

(41) 『太宗実録』卷一四・七年二月辛巳条。

(42) 『文宗実録』卷七・元年五月癸亥条。

(43) 一、僧寺、某山・某寺・某宗所属。(『慶尚道統撰地理誌』「地理誌統撰事目」)。

(44) 世宗六年一〇月の礼曹の啓には「全羅道順天松広寺は曾て恭靖大王重創水陸社、留後司興教寺は厚陵齋宮なるが為に、皆宗に属せざるは未便たり。乞うらくは禪宗全羅道求礼華嚴寺・黄海道殷栗亭谷寺を革め、松

広・興教二寺を以て禅宗に属せられんことを」とあり『世宗実録』卷二六・六年一〇月丙寅条)、礼曹が松広寺と興教寺を宗派に属させる代わりに禅宗属の定数寺刹である華嚴寺と亭谷寺を廢することを求めている。このことは、世宗六年の当初では定数寺刹の指定を受けることと宗派に属することが不可分に関係にあったことを示唆する。

- (45) 晋州牧の例を提示すると以下の通り。「禅宗属、知異山 五台寺 安養寺 化龍寺 月牙寺 法輪寺 百岩寺 青谷寺 青原寺 集賢寺 凝石寺 教宗属、知異山断俗寺」(『慶尚道統撰地理誌』晋州道晋州牧・僧寺条)

- (46) 成宗五年(一四七四)閏六月の藝文館副提学任士洪らの上疏の中で

臣等謹みて『統六典』寺社定数条を按ずるに云く、「京外に三十六寺を置き、兩宗に分隸し、仍お田地を給し、居僧の額を酌定せよ。京外寺社奴婢及び法孫奴婢は、並びに皆属公せよ」と。『成宗実録』卷四四・五年閏六月癸丑条)

と、『統六典』寺社定数条として引用されているように、世宗六年の三十六カ寺の定数寺刹制は、世宗代に編纂された『統六典』に掲載され、『経国大典』編纂以前には法令として存続していた。ただし任士興らは寺刹の増加を抑えようとする意図に即して原則論として

引用しているに過ぎず、成宗一五年(一四八四)に完成することとなる『経国大典』では寺社定数条を収録していない。

- (47) なお、『成宗実録』卷二二・一一年(一四八〇)一〇月壬申条に見える前正言丁克仁の上書では、当時の慶尚道における兩宗所属の寺刹を三千カ寺としている。上書にはこのほか全羅道二千カ寺、忠清道千五百カ寺等、全国で合計九千五百カ寺存在したとする。丁の上書には誇張が見られる可能性が高いものの、世宗六年の定数寺刹制が大幅に崩れていった様子がうかがえる。

Buddhist Monastery Restriction Policy in 1424 of the Chosun Dynasty and the Significance - with cases of Kyoungsang Province

YASUDA Junya

Key words: King Sejong (世宗), Kyoungsang Province (慶尚道), the True Record of the Chosun Dynasty (『李朝実録』), Haeinsa Temple (海印寺), Kirimsa Temple (祇林寺)

When the Chosun dynasty was established following collapse of the former Koryo dynasty, Buddhism of the Korean peninsula that had flourished during the Koryo dynasty encountered severe government oppression.

Quite a few researches had viewed these phenomena from the standpoint of the central Chosun government who placed restrictions on Buddhism; on the other hand, this article turns around the previous angle and explores how the local society had taken in the same changes.

To do so, the rough sketch of the anti-Buddhist policy based on the *Annals of the Chosun Dynasty* is introduced first. Then the cases of the Kyoungsang province after the government oppressive policy which was restricting the number of Buddhist monasteries in effect in 1424 (the sixth year of the king Sejong's reign) is further analyzed.

The previous researches have agreed that the restriction policy did not necessarily induce closing of the monasteries, which were not reserved by the government. However, the case study reveals quite a different result. When the restriction policy was in effect every monastery had to define its sect either Zen Buddhism or Non-Zen Buddhism, and within the sect, the not-appointed monasteries were to close down. Yet, another interesting point is that the number of not-appointed monasteries had gradually increased so that the policy soon lost its binding power.

Afterwards the balance of Zen Buddhism and Non-Zen Buddhism had been lost in this province. The increased number of Zen Buddhism monasteries was a result of adjustment between the control of central government and the actual situation of local society.